

## エペソ人への手紙1章3節「神の祝福の本質」

### 1A エペソの聖徒たち

- 1B 富にあふれる町
- 2B 偶像にあふれる町
- 3B 鎖につながれているパウロ

### 2A 父なる神からの祝福

- 1B 祝福に対する賛美
- 2B 神の恵みに対する応答

### 3A キリストにある祝福

- 1B 永遠のいのち
- 2B 「わたしが、それです」

### 4A 霊的な祝福

- 1B 飢え渴きをもたらす物質
- 2B いのちのパン

### 5A 天上にある祝福

- 1B 錆が出る地上の富
- 2B とこしえに残る財産

## 本文

エペソ人への手紙 1 章を開いてください。私たちは新しく、エペソ人への手紙に入っていきます。午後に 1 章の前半部分を見ていきます。今朝は、1 章 3 節に注目していきます。「**私たちの主イエス・キリストの父である神がほめたたえられますように。神はキリストにあって、天上にあるすべての霊的祝福をもって私たちを祝福してくださいました。**」パウロ、神をほめたたえるところから手紙を始めています。この 3 節は、実は、14 節までギリシア語では一文になっています！彼は、神をほめたたえ始めてから、それを止めることが出来ず、14 節まで、その賛美を続けているのです。この、パウロの賛美を午後の礼拝でじっくりと見ていきますが、その始まりになる言葉を、今朝は取り組んでいきたいと思えます。

ここに「祝福」という言葉が二回、出て来ていますね。ギリシア語では、また英語でもそうですが、先の「ほめたたえられますように」も、同じ言葉が使われています。ですから、三回出てきます。英語ですと、bless です。「祝福」と訳されるし、また「ほめたたえる」と訳しても良い言葉です。あることを、ある人を良く言ったり、ほめることを意味しています。結婚式においては、「お幸せに」という日本語は、これに当たります。しかし、私たちキリスト者は、結婚式だけでなく、いつでも、どこでも祝福する存在です。なぜなら、私たちの神が祝福に満ちた方だからです。( I テモ 1:11,6:15、テトス 2:13)

ですから、礼拝の後に祝福をします。祝福を祈ります。そして互いに、主にあつて、信仰をもって、よいことを言います。私たちは、そうやって祝福を受け、また、神をほめたたえます。互いに良いことを言つて、主をほめたたえているならば、そこには祝福の神が留まってくださいます。

## 1A エペソの聖徒たち

### 1B 富にあふれる町

祝福されているという、私たちは、物に恵まれていることを思い浮かべられるでしょう。食べ物が増産に備えられていて、良い家に住み、家族にも恵まれ、何不自由ない生活であれば、祝福されていると思うのではないのでしょうか。けれども、もしそれが、パウロがここで言っている祝福なのであれば、わざわざエペソにいる信者たちに、手紙を書くに及びませんでした。エペソは、富にあふれる町だったからです。

エペソは、今のトルコ、当時小アジアと呼ばれていたところにありました。エーゲ海に面する、貿易中継都市です。東方のアジアから来る品が、エペソを経由してローマに届きました。その逆も同じでした。そのために、富がここに集まりました。ローマ帝国全体の中でも、有力な重要都市です。その前に、紀元前六世紀には、リュディア王国があり、クロイソスという王がおり、その時にも、栄華に飛んでいました。そのような富のあるところで、パウロは、エペソの信者たちに「神は、あなたがたを祝福しました」と宣言されたのです。キリスト者にしかない、豊かな恵みをこの手紙で説き明かしているのです。

私たち、首都圏の住む者たちも、ある程度、そのことが分かるのではないのでしょうか？東京は、世界でも有数の大都市です。あらゆるものが、ここに集まって来て、何不自由ない生活をしていきます。けれども、そこに祝福があったのでしょうか？私は、バブルの時に信仰を持ちました。その時は、物が溢れて、人々が湧き上がっていました。けれども、そこに私は極度の空しさを覚えました。祝福はそこにはなかったのです。

### 2B 偶像にあふれる町

そして、エペソは偶像にあふれる町です。アルテミス(Artemis)神殿がありました。アルテミス神殿の模型が、パウロの福音宣教によって売れなくなってしまったので、銀細工人たちが騒動を起こしたのを思い出してください。彼らは劇場で、「偉大なるかな、エペソ人のアルテミス」と叫びました(使徒 19:28)。これが、世界の七不思議に入るほどの、巨大なものだったそうです。アジア中から、いや、当時の世界全体から参拝のために集まって来たと言われています。アルテミス自体は、ギリシア神話の出でくる女神で、清純な狩人でありましたが、トルコには古来から、キュベレー(Cybele)と呼ばれる地母神信仰がありました。豊満な裸体の女性が、膝の間から子供を産んでいる像が、発掘されています。こうした因習とアルテミスが混ざって、習合信仰になりました。それで、アルテミス神殿にあったアルテミスの巨大な像には、胸に乳房が何十もあった、かなりグロテスクなものにな

っています。

その他にも、ギリシア神話のまつわる数多くの神々が祭られていました。また皇帝信仰も盛んでした。私も遺跡を見に行きましたが、相当の栄華に富んだところだったのだと想像できましたが、至る所に神殿があり、いろいろな神々が祭られていて、数メートル歩いたら別の神が、みたいな勢いでした。その中で神々は、どのような存在だったのでしょうか？「自分のしたいことをかなえてくれる存在」でありました。性欲を満たしたければ、性欲の神。富を抱きたければ、富の神。酒に酔うための神もいました。その神殿では乱痴気騒ぎをして、薬物もしようしたので錯乱状態にもなりました。また、オリンピックの選手などが勝利を得たければ、ニーケ(Nike)と呼ばれる女神がいました。そうです、ナイキは、勝利の女神の名前です！

次に、それらの神々は、「何をしでかすか分からない、気まぐれな(caoricious)神」であります。福をもたらすと思いきや、理由なく、罰を与えます。だから、神々を宥めるために、お供え物をしたり、祈願したりと、いろんなことをしないとイケません。

そんな中で、パウロは、父なる神、キリスト、そして聖霊なる神が、三位一体の神として、いかに予め計画を立てていて、すべてのものをご自身の目的のために動かしておられるかを描いています。どんなに、エペソの信者に平安をもたらしたことでしょうか？私たちも、不条理の世界に生きていますね。なぜ、こんなことが起こったのか？と思うようなことが襲ってきます。その時に、「これがいけない」「あれがいけない」として原因を探させて、問題を解決するために、これこれをしなければいけないとして、駆り立てるのです。これは、気まぐれな神々に仕えている偶像礼拝と同じなのです。しかし、どんなことがあっても、神がおられて、神はご自分のしていることを良く知っておられることを知ることは、なんと平安をもたらすことでしょうか。パウロは、手紙の中で、こうした、一切ぶれない、すぐれた神のご計画を明らかにしています。

### 3B 鎖につながれているパウロ

そして、このようなエペソの町にパウロが手紙を出していますが、何よりも、彼が投獄されている中で書いたことを知ってください。彼は、鎖につながれていました。(6:20) 皇帝ネロの判決を受けるために、ローマで軟禁状態になっていたんですね。(使徒 28 章)このような中で、どうして「祝福」と呼ぶことができるのでしょうか？私たちは、何か悪いことが起こったら、どう考えてもそれは祝福だと思えません。しかし、パウロは、そのような苦しみの中にあっても、それでも「**落胆することがない**ようにお願いします。」と言っています(3:13)。

## 2A 父なる神からの祝福

### 1B 祝福に対する賛美

もう一度、本文である 3 節を見てください。ここで、「**私たちの主イエス・キリストの父である神が**

ほめたたえられますように。」というのは、「**私たちを祝福してくださいました。**」ということで、神をほめたたえています。主が私たちに祝福してくださいましたから、神をほめたたえています。その逆ではありません。私たちが、神を一生懸命ほめたたえたから、神が、「よしよし、そんなにほめてくれるならば、あなたたちを祝福しよう」と言っているのではないのです。神が先んじて、主権をもって、私たちを祝福してくださいました。だから応答として、私たちが神をほめたたえます。私たちが神に何かをすれば、それは、神がこれこれをしてくださいましたから、何かをするのであって、神が初めに事を成し遂げて下さり、その応答として、感謝と賛美が湧き出てくるのです。

私たちはどうしても、自分たちの行動が、神の行動を決めると思ってしまう。何か良くないことが起こると、「それは、私がこんなことをやったからだ」とします。自分自身に責任や原因を見つけようとします。けれども、これはそもそも、偶像礼拝の考え方なのです。自分がきちんと仕えていないから、神が、十分に必要が満たされていないから、神が不愉快になっている、いらだって怒っているのだ、と思ってしまうのです。このことにお気づきでしょうか？神は、誰にも仕えられる必要などありません。ご自分だけで、ご自分のことを何でもできるのです。

## 2B 神の恵みに対する応答

では、なぜ人に関わろうとされるのでしょうか？それは、恵みのゆえです。神は恵みの神だからです。神は、一方的に憐れみを抱き、愛し、良くしようと思われ方なのです。そこに理由はありません。ただ好きになっているのです。それで、人々が応答して、ご自分に献げるのであれば、それは喜ばしいことですが、それは、自分に何かしてもらえらるから喜んでいてではなく、献げる私たちが神の祝福の中にいるから、それで喜んでおられるのです。父が子を愛する時に、子が立派に育ったらそりゃあうれしいですが、それは子がそのような幸せを手にしたからうれしいのであって、自分に何かしてもらったからうれしいのではありません。愛ってそういうものですね？ましてや父なる神は、そういうお方なのです。

私たちが自分の行動に拘っているのは、罪から来ています。アダムが罪を犯して、初めに行ったのは、いちじくの木の実によって自分の恥を隠すことでした。自分の行いによって、救おうとしたのです。けれども、神が園の中を歩かれたら、それでも恐ろしくなって、自分自身を隠したのです。これが罪人の姿であり、自分のことに拘るのは、実は、自分で自分を救おうとしているからです。

エペソ人への手紙全体にある順番に注目されると良いと思います。これからじっくり、学んでいきます。そこで気づくは、「神がキリストにあってしてくださいましたこと」だけなのです。1章から3章までは、神がキリストにあってしてくださいましたことしか書いていません。そして、4章から始めて、「召された者として、召しにふさわしく歩みなさい。」との勧めがあります。主がしてくださいましたことに応答して、自分がしていくのです。だから、もっと道徳的なことを考えているだけの人は、1章から3章までは非常に読みにくい内容になっています。なぜなら、そこに自分ができるとは、何一つ書いていな

いからです。神が自分のためにしてくださったことは、わんさと書いてあります。

そして実は、これが聖書全体の流れです。初めに、神が天地を創造されました。神がしてくださったのです。そして、それに人が応答するのです。人が神のためにすることは、必ず神が初めに人のためにしてくださっているのです。ところが、自分の行動が含まれている部分ばかりが目にとまります。この、奴隷根性というか、刷り込まれた、「自分中心の世界」から、脱却しないとイケないですね。そのために、エペソ書をじっくり見ていきましょう。

私が、その恵み体験をしたのは、思い出すに、宣教会議(Missions Conference)でした。カリフォルニアで、毎年、行われていました。初めに登壇したのが、チャック・スミスでした。彼から、なんて言われるだろう？救われている人なんて、ほとんど出ていないけれども、「祈りが足りない！」とか、「こんなことをしているから、うまく行っていないのだ」とか言われるのではないかと思いました。ところが、なんと、第二コリント 1 章から、慰めの神があなたがたの苦しみを知っておられて、あなたがたを慰めることができる、という話だったのです。その時以来、慰められることはあっても、努力が足りないということで叩かれることは一切ありませんでした。むしろ、どんなに実が見えなくとも、主にあって行っていることは、主の目に美しいことをたくさん教わりました。そして賛美の歌の内容も、主がなされた御業が中心であり、私たちはその恵みに引き寄せられていきました。このように、父なる神をほめたたえるのは、先に神が祝福してくださったからです。

### **3A キリストにある祝福**

その祝福の内容ですが、「**神はキリストにあって**」とあります。キリストにある祝福です。パウロは、エペソ人への手紙において、父なる神が行われることについて、数多く、キリストにある祝福を書いています。4 節には、キリストを指す「**この方にあって**」とあります。次に、5 節は、「**イエス・キリストによって**」とあります。6 節には、「**その愛する方にあって**」とあります。7 節には、「**このキリストにあって**」とあります。9 節に、「**キリストにあって**」とあります。10 節にも、「**キリストにあって**」とあります。11 節も、「**またキリストにあって**」です。12 節に、「**キリストに望みを置いている**」とあり、13 節、「**このキリストにあって**」とあります。キリストから離れたところにある神の祝福はないということです。

### **1B 永遠のいのち**

私は、初めにエペソ書や、他のパウロの手紙を読んだ時に、なんか、パウロはややっこしい書き方をしているな、と思っていました。もうわかったよ、そんな、「キリストにあって」を言わなくても、そうなんでしょう、としか思っていませんでした。けれども、今は、自分もしばしば「キリストにあって」ということを使います。なぜか？それは、この方にこそ、いのちがあるからです。ペテロが告白しました、「ヨハ 6:68 主よ、私たちはだれのところに行けるでしょうか。あなたは、永遠のいのちのことばを持っておられます。」主から離れて、永遠のいのちのことばはありえないのです。そして、ヨハネは、第一の手紙でこう言っています。「Iヨハ 5:11 その証しとは、神が私たちに永遠のいのちを

与えてくださったということ、そして、そのいのちが御子のうちにあるということです。」キリストから離れては、何もないのです。すべてはキリストの内にあります。

ハワイに旅行をしたことがあります。オアフ島に、ポリネシア文化センターというものがあります。とても良いところでしたが、なんか変だな～、食前に祈りまで献げている～とか思っていました。そうしたら、そこはモルモン教の施設なんですね。そして、そこで物を売っている人がいたのですが、日本語ができる人でした。「私は、宣教師だったんです」と言いました。それで、私たちは、「ああ、モルモン教の宣教師だったのだ～」と分かりました。そして彼は英語に切り替え、「日本人は良い人が必要です(Japanese need good people.)」と言いました。私は反論しました、「日本人は、良い人たちを必要としない。イエスを必要するのだ。(Japanese don't need good people; they need Jesus!)」びっくりしていましたね。

私たちは、イエス・キリスト以外のところに、何か良いものを見つけようとします。例えば、もっと愛が必要だとします。それは、イエスをもっと必要としているということです。平安が必要だと言います、それは、イエス様が必要ということです。忍耐が必要だと言いますが、それはイエスをもっと必要なのです。イエス様のうちに真理があり、いのちがあり、道があります。この方のうちに、すべてがあるのです！

## 2B 「わたしが、それです」

イエス様が、何度となく、「わたしが、それです」と正されたことがありましたね。例えば、マルタが、ラザロが死んだことについて、「終わりの日に兄弟をよみがえらせると信じている」と言ったら、イエス様が、「わたしはよみがえりです、いのちです。」と言われました(ヨハ 11:25)。群衆が、天からのパンをくれ、と言ったら、「わたしがいのちのパンです。」と言われました(6:35)。この方に、すべてがあるのです。

## 4A 霊的な祝福

そして、パウロは、この祝福は「**霊的祝福**」と言っていますね。物質的な祝福ではなく、目に見えない、霊についての祝福です。

## 1B 飢え渴きをもたらす物質

今、お話しした、イエス様についてきた群衆に対して、「わたしがいのちのパンです。」と言われましたが、その次にこう言われています。「ヨハ 6:35 わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者はどんなときにも、決して渴くことはありません。」物理的なパンであれば、食べたなら、またお腹が空きます。けれども、霊的なパンは、決して飢え渴くことはありません。これが、霊的祝福の醍醐味です。物があふれている時に、どうして私たちは虚しさを覚えるのか？それは、物によって、神にしか埋められない空洞を埋めようとしているからです。その虚しさを埋めるた

めに、ある時はお金儲けに走り、またある時は異性との付き合いに走り、いろいろなものを求めていくのです。けれども、それが埋まらないので、さらにもとめます。

## 2B いのちのパン

けれども、靈的祝福は違います。イエス様が何度となく、「決して飢え渴くことがない」と言われているように、御霊によるものは、尽きることがありません。一時的な安らぎを与えるのではなく、どんなことがあっても変わらない平安を与えます。目に見える世界であれば、例えば彼氏であるとか、どこまで愛されているかどうか分からないという不安がありますが、靈的祝福では、いつまでも変わらない愛なのです。喜びも、その時に騒いだり、笑ったりしても、その後に空しさや悲しみがやってきます。けれども、主にある喜びは、状況に拠りません。このように、靈的な祝福は、再び飢えたり、渴いたりすることがないのです。

## 5A 天上にある祝福

そして、これが「**天上にある**」祝福だということです。地上にある祝福に対して、天における祝福の違いは何でしょうか？

### 1B 錆が出る地上の富

これは、「天地は過ぎ去る」というところにあります。今の目に見える天地は、いつか過ぎ去りますが、イエス様が言われたように、ご自身の言葉は、決して過ぎ去ることはありません。天からのものは、いつまでも残ります。地上のものは、朽ちるし、腐るし、消え去っていきます。「マタ 6:19-20 自分のために、地上に宝を蓄えるのはやめなさい。そこでは虫やさびで傷物になり、盗人が壁に穴を開けて盗みます。20 自分のために、天に宝を蓄えなさい。そこでは虫やさびで傷物になることはなく、盗人が壁に穴を開けて盗むこともありません。」使徒ペテロも、こう言いました。「I ペテ 1:4 また、朽ちることも、汚れることも、消えて行くこともない資産を受け継ぐようにしてくださいました。これらは、あなたがたのために天に蓄えられています。」

### 2B とこしえに残る財産

これが、大きな違いなのです。エペソの人たちの信仰は、財産として今にまで続いています。けれども、キリスト者ではないエペソの人たちの財産は、どこまで続いているのでしょうか？私は、その遺跡に行きましたが、たんなる遺跡だけで、観光客の目を楽しませてはいますが、人々に大きな影響を与えているわけではありません。けれども、貧しかったとしても、エペソの人々の信仰は、こういう形で、私たちにも受け継がれています。

エペソの、最もきらびやかであったであろう通りに、その道に落書きがあります。円が描いてあって、その中に自転車の車輪のような線がいくつか入っています。それは、暗号であり、「イエスは神の子キリスト」の頭文字を取った、ギリシア語です。イクサスという、魚の意味にもなります。当

時、人々に知られると迫害を受けるので、彼らは密かに、そのような落書きで、ここで集会をしていることを暗に示していたのです。

これが到底、当時は、目に見える形では祝福だと思えないでしょう。けれども、どれだけの人々を、エペソの人々も信じた福音が救って来たでしょうか！この違いなのです。私たちには、物質の祝福は欠けているかもしれませんが。けれども、霊的な祝福には富んでいます。そして、いつか過ぎ去っていく地上の祝福ではなく、消え去って行かない天上の祝福があります。その天から、いつでも私たちは、キリストにあって恵みと賜物を受け取ることができるのです。